生理心理学をガラパゴス化してはいけません

○山田 富美雄 (関西福祉科学大学)

生理心理学は絶滅危惧種

「生理心理学は絶滅危惧種かもしれない」。2014 年 9 月に同志社大学で開催された日本心理学会第 78 回大会の公募シンポジウム (PNEI 研究会主催) で、指定討論者として立った坂野雄二先生 (北海道医療大学) は開口一番こう語られた。当日の私のメモによると、

『実験室で細かな仕事をやって完結しているのが生理心理学。臨床心理学は実社会の中で要請に応じている。バイオフィードバックが辛うじて実用に供するものになってはいるが、生理心理学が医療の現場で役立っている分野はないのではないか』

という概要であった。坂野先生独特のジョークとして聞き流すこともできたが、私にはそれができなかった。やはり「社会という現場で役立つ生理心理学」をめざすべきだとおもった。

今回の生理心理学会を主催することが確定した 2014 年春、私は「社会に貢献する生理心理学」をメインテーマに掲げようと準備委員会の席上で語った。あるメンバーは、「十分役に立っているよという人もいれば、まったく役立っていないという人もおり、さらには社会の役に立つなどもってのほかと言う人たちまでいるのじゃないですか。」と語ってくれた。いろんな立場の人が生理心理学会というコミュニティに集まっていることを改めて気づかされたのだった。

時が経ち、私が大学を異動することが正式に決まり始めた頃、ようやく腹が決まった。初日は「医療・健康への貢献」をテーマとし、二日目は「産業・社会への貢献」をテーマとするというのはいかがかと。こうして 33 回大会の色が決まった。

社会貢献をめざす生理心理学という着想

私には二つの研究者としての顔がある。ひとつは生理心理学者として、生体現象から心の働きを覗き込む技術屋、実験屋としての顔である。もうひとつは人々の心身の健康づくりの実践家という健康心理の専門家としての顔である。前者は学生時代からの顔、後者は医療系大学に勤め始めてからの顔である。長く二つの顔を使い分けていたが、20 年ほど前からこれらが交わりはじめた。そのきっかけは 2 つある。

きっかけ 1 ひとつのきっかけは PPI (プレパルス抑制) と PNI (精神神経免疫学) との出会いである。PPI は私の修士論文のテーマであり、後に統合失調症のバ

イオマーカとなることから精神科医療と重なるテーマである。実用的な測定システムを日本サンテックの金子さんと開発し、禁煙効果を PPI で査定する試みを行った (山田, 2002)。PNI は、岡山大学の田中宏二先生率いる科研チームで唾液中 s-IgA を健康指標とするための基礎研究として 1993 年に開始した。成果が出始めた頃、田中先生から「いつまで基礎研究しているのですか?」とパイを投げられた。基礎ばかりではなく、PNI 研究の背景にある生体機構から、実社会に役立てる研究が必要だとの示唆であった。その後、自前で生化学指標が分析できる施設とスタッフを得、学会でも若手が育ち PNI 研究が生理心理学の一分野として認められるようになった (山田, 2005)。健康査定を生理心理学が賄う。まさにこれが 2 つの研究の合流の姿といえる。

きっかけ 2 モノ作りに生理心理学を活用する視点との出会いが第二の契機であった。人間感覚計測応用技術という通産省 (現在経産省) のプロジェクトが終焉を迎えた 1998 年、私は最終評価委員に選ばれ、それまでの研究成果を精査する作業を手伝った。人間工学における生理心理学 (PIE) という国際組織にも参加した。「感性」のあとの「感動」、そして現在の「かわいい」へとつながる研究の流れの中で、私は「プチ感動」をまばたきと脳波 Fm θ で計測できると語った (Yamada, 1998; 山田・江川, 2006)。

今回の学会はこうした私の研究フィールドの枠内からみえる、今の生理心理学会というコミュニティへのアジテーションともいえる。基礎研究は大事である。しかし社会に貢献できる研究を後押しするのが学会の役目であり、社会貢献こそが学術団体としての生理心理学会の使命といえるのではないだろうか。

文 献

- Yamada, F. (1998). Frontal midline theta rhythm and eyeblinking activity during a VDT task and a video game: As useful tools for psychophysiology in ergonomics. *Ergonomics*, **41**, 678-688.
- 山田富美雄 (2002). 瞬目による感性の評価: 驚愕性瞬目反射と自発性瞬目による感情評価 心理学評論, **45** (1), 20-32.
- 山田富美雄 (2005). 心理的介入の効果を免疫指標で評価する 心理学ワールド, **30**, 5-8.
- 山田富美雄・江川猛 (2006). モノ作りコンセプトとしての「感動」の生理心理学的測定. 生理心理学と精神生理学, **24** (1), 49-56.